

春風秋霜 7月号

平成29年7月3日
島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 教育委員の学校訪問から

6月に島一小・伊太小・湯日小・初倉南小を教育委員が学校訪問しました。島一小は、都合により突然の訪問になりましたが、安定した授業風景に感動しました。対話的な授業も多く、授業の場面が変わっても、子供たちの「聞く姿勢」が自然にでき、授業の基本に「聞くこと」がしっかり位置づけられていることが分かりました。また、学級の掲示に、「みんなで話し合っ

て解決し、自分たちでまとめをみつける授業」(5年生)のように、意識の高い授業目標が子供たちの手で作られていることにも驚かされました。

伊太小でも、小集団による対話的な授業が多く、島一小と同じように聞くマナーが定着していました。1年生から習慣化を行っている成果だと思いました。また、俳句や陶芸といった小規模ならではの特色ある教育を進めるだけでなく、教育環境の整備にも力を入れ、廊下や階段の掲示をはじめ、花の栽培にも計画的に取り組んでいる様子を見て、全職員が学校運営の方向性を共有していると思いました。

初倉南小は、ALを意識した授業が多く、子供たちの「聞く姿勢」も定着していたので、学校に安定感がありました。湯日小は、縦割り活動や一輪車練習を通して、「へこたれない心」を育てていました。欠席者が大変少ないことや地域との連携にも学校の特色が出ていました。

今後、訪問する学校の子供の様子を見ることを楽しみにしています。



活発に意見交換をする島一小児童

2 市内小学校の運動会に参加して

5月27日(土)6月3日(土)に行われた小学校の運動会を参観しました。当日の天気は良かったものの、前日の天候によって会場の準備に苦労したと聞きました。

神座小学校では前日の夜まで雨が降り、グラウンドに水がたまっていたものの、職員だけでなく自治会の皆様も早朝5時頃から駆けつけて作業をし、開始時刻は遅らせたものの、実施にこぎつけています。島一小では、強風のため前日準備を当日準備に切り替えたところ、当日の早朝5時には10人近くの職員が自主的に集まり、準備が行われたそうです。強風への対策もしっかり行い、プログラム変更を保護者にメールで伝えるなど、細かい配慮もなされていました。

大きな課題に直面した時に組織力が問われます。職員の自主的な行動だけでなく、対外的な協力関係も普段からの関係ができていなくては実現できません。今年の運動会は、多くの学校が苦労をしたと思いますが、各学校の底力を見ることができました。

3 「へこたれない力」について

国立青少年機構調査によると、友達と熱中して遊んだ経験(時間を忘れて遊ぶ経験)をした子供は、「へこたれない力」が育つということです。子供たちが夢中になって遊ぶ姿を見ていると、子供同士の小さなぶつかり合いもありますが、工夫して乗り越えています。親の前では涙

を流すような怪我やトラブルでも、子供同士でいる場合は我慢し乗り越えています。子供たちは、遊びを通して我慢する力や社会性などを身に付けていることが分かります。

金谷小学校の学校便り5月号にも、遊び・体験の重視が掲載されていました。大人が子供の頃体験したことの中から、心に残っていることを子供に伝え、子供の体験へつなげたいという趣旨でした。知らないから体験しないということがあります。遊びや体験について、教師の価値付けが子供の「はじめの一步」につながることを願っています。

※ 昨年度文部科学大臣賞を受賞したジュニエコの募集が始まっています。締め切りは、7月10日です。小中学生への紹介をお願いします。

4 万引きの刑罰について

6月13日(火)に行われた防犯協会総会で配布された資料の中に、平成28年度の島田市における刑法犯少年の検挙人数が58人増加したとありました。万引きの件数は多く、軽い気持ちで万引きする青少年が多いと示されていました。

万引きの刑罰は、「10年以下の懲役または50万円以下の罰金」となっています。罰金刑の導入により、ささいな万引きでも実刑に処せられることがあると記されていたので、子供たちへの指導が必要だと思いました。また、自転車盗・オートバイ盗も9件あり、「ちょっと借りるだけ」との思いで行っても、りっぱな犯罪だと子供たちに自覚させる必要があります。

肘かけ椅子

中村 正昭 文化課長

「アートがぐんと近づいてくる」

博物館で作品をご覧になっているお客様が、学芸員に「この作品、どこがすばらしいのでしょうか」と聞かれている場面がたまにあります。美術的価値を頭で「考え」「理解しよう」とされているのでしょうか。

ずっと以前、子供と行った動物園でのこと。保育園のスモックを着た子供が「うさぎ」を指差し、「ねえ、これ何？」と聞かれた時に、「何だろうねえ？」と先生。子供は答をもらえず、自分でそれが何であるのか、必死になって知ろうとしていました。

ウサギの名前よりも、毛の柔らかさ、目の赤さ、抱えた時のぬくもり、柔らかく匂ってくる感触を……。小さな手に抱えた「存在」に全感覚を総動員して出会っていました。先ほどの博物館での「理解」するのとは、全く違ったものの見方の体験です。

身近ではそんなアート体験が、今、溢れ出しています。今年3月には、「無人駅×アートルネッサンス」展示室の外へ飛び出した作品が、沿線には桜・新芽の息吹きの中、風景に溶け込む。絵画・彫刻・映像などアートを「考える」「理解」するのではなく、「感じる」「出会う」体験。

また、4月の仲道郁代ピアノリサイタルでのこと。3、4曲弾いた後、調律師がステージのピアノを解体。やにわにベーゼンドルファーの鍵盤を引き抜くと、97鍵盤のハンマーフェルトがずらり。仲道さんのステージ上に招かれた子供たちに投げかけた言葉は、「これは何でできていると思う？さわってごらん」でした。その子供たちは、どんなことを五感で感じ、鍵盤に出会ったのか。今、アートは、私たちとの距離をぐんと縮めてきています。素直な心で、まずは感じてみてはと。